

書評：『多元的共生社会が未来を開く』
(尾関周二著、農林統計出版、2015年)

A Review of S. Ozeki's *Multiple Kyosei Society Creates the Future*

渡辺 憲正

WATANABE, Norimasa

第Ⅰ部「共生の思想と現代」(1~2章)、第Ⅱ部「共生理念と〈農〉の思想」(3~4章)、第Ⅲ部「人類史・世界史の新たな視座の探求と共生概念の意義」(5章~7章)、第Ⅳ部「近現代文明の危機と共生社会へ向けて」

(8~9章)から構成される本書は、共生理念を基軸に人類史を遡り、3・11 原発大震災が露呈させた近現代文明の危機を超えて新しい「多元的共生社会」というオルタナティブを提示する問題提起的な試みである。

本書のメリットは、主に 2 つあると考えられる。1 つは、近代文明(第 2 の人類史的転換)批判を提起し、それを人類史的視座から論じて資本主義システム批判と結合したこと、もう 1 つは、資本主義システムからの「漸次的脱出」に向けて、多元的共生社会という理念の下に具体的な提言を行っていることである。以下、これらの問題提起を概括的に示したのちに、私なりに考えた論点を——研究誌の書評であることに鑑み——1 つだけ記して書評に代える。

1. 文明史的視座からの問題設定

著者によれば、従来のマルクス主義の唯物史観は、社会構成体の土台をなす生産力と生産関係の矛盾とその克服によって生産様式の発展——社会構成体の歴史——が起こるとしてきたが、この通説では生産力と自然生態系との矛盾がもつ重大な意味はほとんど注目されてこなかった(74)。しかし、マルクスには「人間と自然との物質代謝」(40)という視点があり、この視点から人間と自然生態系との関わりに注目し、世界史を人類史にまで拡張して人類史的視座から問題を設定できるようにするとされる(5章)。

この場合、人類史は次のように構成されることになる。

(先史時代)

- 1) 700 万年前：人類の誕生
- 2) 200 万年前：出アフリカ
- 3) 25 万年前：ホモサピエンスの誕生

4) 5 万年前：「意識のビッグバン」

- 狩猟採集社会
- バンド社会
- 平等主義

(第 1 の人類史的転換)

5) 1 万年前：農業革命→文明社会

- 農業(牧畜を含む)文明
- 都市の成立
- 階級社会(貧富・不平等)の成立
- 国家の成立
- 世界帝国

(第 2 の人類史的転換)

6) 16 世紀以後：産業革命→近代文明

- 工業文明
- 成長主義
- 大都市中心
- 資本主義
- 国民国家
- 世界経済

かくて「人間と自然との物質代謝様式」(74)にもとづくならば、人類史において画期をなすのは、農業革命(6章)と産業革命(7章)による物質代謝様式の大転換である。とくに近代資本主義の生成は、「大量の人間を土地(自然)から切り離す過程」(94)として改めてとらえ直される。つまり、それは搾取と支配という脈絡だけでなく、もっと本源的な人間と自然との共生の破壊として、人類史的立場づけを与えられるのである。

3・11 原発大震災は、この近代文明の負の諸側面を顕わにした(8章)。それらは、1) 科学技術信仰の破綻、2) 生態循環からの工業化社会の逸脱、3) 国民国家の暴力性の露呈、4) 農村の都市への従属関係、5) 公共圏の形骸化、等として現れており、もはや人間と人間の資本主義的關係だけでなく、人間と自然と

の関係においても分裂の極点に達した(112-115)。問題を人類史的視座から、このように把握するところこそ、本書の第1のメリットをなすといえる。

2. 資本主義システムからの漸次的脱出の提起

かかる問題把握から提起されるのは、1) 資本主義システムからの脱出、2) 生態循環の回復(自然との共生)、3) 農村と都市の共生、4) 公共圏の構築、5) 新たな「世界システム」の形成、などである(9章)。そして、この提起が本書の第2のメリットをなすのである。著者は、文明批判を資本主義批判と結合して論じる(136)。しかし同時に、資本主義システムを前提した上で、それからの部分的解放(137、141)、漸次的縮減(147)、つまり資本主義システムからの漸次的脱出を構想し、いくつかの方途を提起する。

まず第1に提起される方途は、「資本主義的生産の全体系」がもとづくこととされる「労働力の商品化」(136)から脱却する下記の4つである。

- 1) 〈農〉の復権、地産地消、自給的共同体の形成
- 2) ディーセント・ワーク、ソーシャル・ビジネス、労働者協同組合
- 3) ベーシック・インカム
- 4) 自己確証的な労働の比重拡大

いずれも、「脱資本主義への漸次的過程における条件づくりの具体的なイメージ」(141)を与えるものとして位置づけが与えられる。非正規労働者が4割を占め、ブラック企業が横行している現代の資本主義に対する抵抗は、さまざまな形態をとってなされるべきであり、脱資本主義という脈絡で語られるさまざまな方途は、仮に「体制内改革」であろうとも、資本主義批判から外れるものではない。

第2の方途は、地産地消の自給的共同体などを構想するために、技術を「〈農〉を基礎にした農工共生社会」(146)にふさわしい技術に転換し、かつ都市と農村の新たな共生関係を実現することである。農工共生社会は、もはや巨大技術依存型にはならない。代替技術が主流を占めるであろう。かつてシューマッハーらが提起した「中間技術」や「代替技術」「適正技術」が〈農〉を基礎にして改めて想起される(143-144)。しかも、それは、単純に工業文明における代替技術というよりも、脱工業文明の脈絡において、農工共生文明という段階へ至るべき技術として位置づけ直される。いずれにせよ、核開発技術や原発技術はもはや人類の生存と

相容れない。近代工業文明は、環境制約・資源制約の中で限界に達する。このときに「環境保全的な農学的技術」(146)主導の技術体系が構想されるのは、当然のことのように思われる。

他方、このような技術の転換は、それに適合した共生社会システムの構築と結びつけられる。このシステムは、具体的には、一極集中型都市を解体して、中小規模の多極分散のネットワーク型の都市からなる「都市農村共生社会」(148)と定式化される。著者によれば、これも未来の理想図ではない。ドイツに現存するような「産業・生活田園都市」(149)の構想である。

第3の方途は、新たな「第3の世界システム」を形成することである。これは、世界帝国と世界経済という、ウォーラーステインの世界システム論が提起する区分にもとづいて、「比較的小規模な、高度に自立的で自給的な経済」(127)を基礎にしつつ、広範な分業体制をグローバルな仕方でネットワーク的に補完しあう世界システムという提起である。この世界システムの現実性は、1) 核戦争の脅威、2) 地球生態系を脅かす環境・エコロジー問題、3) 生存手段の安全保障の問題、4) 貧富の格差拡大の問題、5) 人口問題等が、いずれも「グローバルな仕方でしか抜本的に解決できないこと」、世界の「資本主義システムの拡大再生産」に関わりがあること、によって与えられる(128)。

それゆえ、構築されるべき第3の新たな世界システムは、1) グローバル資本主義の統制、2) 平和、環境、農業、福祉を共同して目指す国際連帯国家への転換、3) 国際立憲主義の確立、4) 先進国と発展途上国の協調など(131-135)をとおして、形成される。これらが「移行期」(132)を形づくるとされるかぎり、第3の世界システムはさらに高次のシステムとも見られるが、この形成過程はたぶん連続的である。肝要なのは、ここでも現存システムを前提として、それが提起する諸問題を部分的に——資本主義の法的統制等によって——解決する方途が提起されていることである。

以上をまとめて示すならば、下記のように図示できる。

工業化社会	→	多元的共生社会
=近代文明		=脱近代文明
成長主義		共生持続
工業文明		農工共生文明
大都市中心		農村都市共生社会
資本主義		脱資本主義
国民国家		国際連帯国家
世界経済		第3の世界システム

3. 1つの論点

2つのメリットとも関連して、以下、論点になると思われる問題を1つだけに限って指摘する。それは、資本主義システムからの脱却と多元的共生社会ないし新しい文明との関わりである。著者によれば、多元的共生社会は——私の誤解でなければ——現存資本主義システムを前提としている。したがって、それによる問題解決はなお「部分的暫定的」である。部分的暫定的であることが、ここでの問題なのではない。そうではなくて、それがはたして「新しい文明」となるのかどうか、あるいは「第3の人類史的転換」を果たすべきものかどうか、が問題なのである。

いま必要なのは、少なくとも実現不能な未来図を描くことではない。この意味では現実的な「脱資本主義システム」の構想は意味がある。しかし同時に、本旨からすれば、それは資本主義システムの枠内に収まらず、このシステムを超えるものを志向する必要がある。著者もまた近代批判を資本主義批判と結合すべきことを述べている(136-137)。そうであるなら、共生持続、農工共生文明、農村都市共生社会、国際連帯国家、第3の世界システム等、脱近代文明の特徴として示された水準は、「第3の文明史的転換」に匹敵しうる変革なのかどうか、が問われてよい。

著者が何某かの共感を示した人類史観ないし文明史観には、基本的に下記の4つの系統が存在する。

- | | | | |
|-----------|----------|-----------|----------|
| 1) 狩猟採集社会 | → 農業社会 | → 工業化社会 | → 農工共生社会 |
| (先史) | (1万年前) | (近代) | (脱近代) |
| 2) 伝統的共同体 | → 近代社会 | → 共生社会 | |
| (前近代) | (近代) | (脱近代) | |
| ↑ | ↑ | ↑ | |
| 聖域的共生 | 競争的共生 | 共同的共生 | |
| 3) 原始共産制 | → 奴隷制 | → 封建制 | → 資本制 |
| (先史) | | | (近代) |
| 4) 贈与・互酬 | → 略取・再分配 | → 市場・商品交換 | → X |
| 交換様式A | 交換様式B | 交換様式C | 交換様式D |
| | | | (近代) |

第1系統は、すでに示した人類史的視座によるもの(25-26)。この場合は、「人間と自然との物質代謝様式」視座が基本をなすと見られる。これに対して第2系統は、明示されないものの、3種類の共生論(8)と

結びつけて論じられる歴史観である。第3系統は、唯物史観によって示される図式、すなわち生産様式を基礎とするマルクス主義的歴史観である(74)。そして、第4系統は、柄谷行人によって示される交換史観(84-89)である。

いま上記諸系統の関連——生産様式を基礎とする史観と物質代謝様式にもとづく史観との接合はいかに果たされるのであろうか等——は問わないとして、いずれにせよ著者が近代から脱近代を志向していることは明らかである。したがって問題は、ここに示される脱近代が「第3の文明史的転換」を意味するのかどうか、にある。あるいはそれは、はたして現存資本主義システムの廃棄を前提とするのかどうか、と言い換えてもよい。それとも「第3の文明史的転換」は、資本主義システムの廃棄でなく、あくまで資本主義システムを前提にしたものとして構想されているのであろうか。

繰り返すが、現時点で、資本主義システムの廃棄を安易に想定することは現実的でない。したがって、「脱資本主義への漸次的過程における条件づくり」を提起するのは実践的に必要である。しかし他方、著者も指摘するように、今日は「資本主義の自壊」「資本主義の終焉」が語られる時代である(130)。もとよりそれは、「自動崩壊」ではないし、「平和的終焉」でもないであろう。あるいはさらに暴力的形態を取って惨禍をもたらす可能性すらあろう。だからこそ、資本主義システムの廃棄——近代西洋文明の止揚——という人類史的転換を理論的に提起してよいのではあるまいか。問題はそれがいかなるものかである。たぶん、それは、共生持続、農工共生文明、農村都市共生社会などによって提起される方向と異なるものではありえない。しかし、その条件は何か。それらの方向がたとえば「定常型社会への転換」(135)を想定するならば、それは資本主義システムの廃棄を前提せざるをえない。このとき、資本主義システムの廃棄と多元的共生社会とはどう関連するのか。多元的共生社会における人類史的転換の内容が問われるのではあるまいか。

いま少し個別的に指摘する。多元的共生社会は、ローカルな共同体的在り方と地球生態系との共生を実現する社会システムであるとされる。一方に地域共同体の自立性を高め、他方にグローバルなネットワークをも実現する世界社会である。これは、何らかの支配秩序、社会統合なしに成立しない。では、多元的共生社会ではどのような支配秩序、社会統合が構想されるのか。この視点から本書の提言を再読すると、ネットワーク型民主主義の徹底、都市農村共生、「地域共同体と公共圏の統合」(151)など、さまざまな示唆が与えら

れていることが分かる。工業文明を脱却すべき多元的共生社会は、現在の支配秩序を（平和的に）廃棄せざるをえないであろう。これが、資本主義システムを前提して可能であろうか。場合によっては、たしかに政治的な規制が資本主義システムの廃棄に先行するのかもしれないが、両者の関係はいかなるものであろうか。

第3の新たな世界システムについても同じことが指摘されうる。第3の新たな世界システムが、平和、環境、農業、福祉を共同して目指す国際連帯国家への転換、国際立憲主義の確立、先進国と発展途上国の協調を要請するという場合、国際的な法治状態へ向けて「国際的公共圏」を構築し、「国際立憲主義」を確立するという課題が、国際連合と結びつけて示される（133）。現在の世界システムを前提する以上、国連の下に国際的な法治状態を確立する方向は、グローバル資本主義を統制するために一定の妥当性があることを認めざるをえない。しかし、「途上国の管理された成長政策は重要」（135）、「[途上国に対する] 経済的・科学技術的な様々な支援」（同）という叙述からすると、それは、先進国と途上国の非対称的関係を前提に、先進国優位、つまり資本主義優位の提起となっていないだろうか。国際立憲主義はそれを超えるのだろうか。

著者の構想は、どこまでも地域、農業、環境の視点にもとづいて近代西洋文明の止揚をはかるというところにある。この場合、対極にあるグローバル世界システム、工業と商業（金融）、資本をどう制御・統合するのかという問題がつねに付いて回る。支配秩序、社会統合の次元が資本主義システムの廃棄と関連して、つねに問題になるということである。本書に学ぶことは多い。対話的議論が続くことを切に願う。